紀州人（昭和62年9月）

先祖の墓地

木田　宏

去る９月１日，母親が永の眠りに就いてしまった。８６歳であった。

早速，色々な石屋さんから，墓地や石碑の案内が来る。都内や近県の公共墓地や寺院の墓地が多種多彩に紹介されていて，墓地を必要とする者にとっては，有意義な案内であると思う。我が家の場合には，既にその必要が無かったので，度々の売り込みには，閉口させられたが，墓地の使用料やその所在地など，最近の世情の一端を知ることができた。

生きている人間の住宅問題も，地価の高騰で無茶苦茶になっているが，死後の住まいも中々に大変である。現世の住まいと同様に，墓地も狭くて高価になっている。少しゆったりした所に眠ろうとすれば，遺族の者には中々来て貰えそうにない遠隔の地に，都落ちする外はない。

母の遺骨を埋葬できる墓地は，住まいのある市川の霊園で，夭逝した子供の為に用意したものである。その時母は，孫が１人では可愛そうだから，戦前既に死別した父の骨を分骨して一緒にすれば，皆で四季折々にお参りすることができる，自分が死んでも，ここに一緒に埋葬して貰えば，皆に会えるではないかと話していた。

そのおかげで，今回墓地の手当てに慌てることはないのであるが，紀州の山奥にある先祖代々の墓をどうしたら良いかという基本問題は残るばかりである。不在地主であったが故に何も残らなくなった山の中腹に，ご先祖様の墓が，自然石のものまで何十と並んでいる。その墓地に立って，四囲の山並みを眺めていると，せっかく静かに休んでいるご先祖様を，都会に連れて来ることもあるまいと考え込んでしまうのである。

しかし，墓地が何ヶ所にもなることは，これまた問題である。我々の世代が子供たちに先祖の墓を引き継ぐとき，先祖の祭りと共に，墓地の拡散をどうするかという難問に困ることであろう。

母は広島県尾道の生まれで，当時で言えば都会育ちであったが，父は，紀州の山奥の出である。母は，結婚したとき，大阪の天保山から船で，勝浦の港に入り，そこから籠で新宮へ，そして，熊野川を曳舟で請川まで上った。文字通り，人が肩に縄を掛け，岸をつたいながら舟を曳いて上ってゆく。熊野川を上るだけで丸一日掛かる行程である。請川で一泊し，さらに三里の道を歩いた。余程印象深かったであろう。

先祖の家屋敷と墓のある静川の平という小さな集落は，本宮，湯の峰，川湯といった景勝地から，少し奥まったところにある。今日車で走れるようになったと言っても，不便な山奥であることに変わりは無い。母は時折，よくもあのような山奥に人が住んでいるものだとの感想を洩らしていた。ほとんど生活したことのない山奥に，たとえご先祖様と一緒とは言いながら，休む気にならないのは無理もあるまい。

戦前からの不在地主で，今あるものは，山の中腹にある屋敷跡とその一番の高みにある墓地だけである。ご先祖様の墓。